

Another Days



第4話 【The Door
to
the Nightmare】

Aymic

★ はじめに。 【Another Days】について。 ★

【ザ・シムズ3】とは、仮想世界に住む人間（シム）を操作し、もう一つの日常生活をシミュレーションして楽しむと言う、2009年6月4日に発売された人生シミュレーションゲームです。

【ザ・シムズ】シリーズの第3作目にあたり、開発元はElectronic Arts(エレクトロニック・アーツ)です。（※ Wikipedia等、参照。）

◆ この【Another Days】の作品および物語に関わる物は全て、作者個人があくまでも個人的に作成・設定した上でプレイしている物を元に作成した物であり、公式とは一切関係がありません。

◆ 【Another Days】は、当作品作成者であるAymicが個人的にプレイしているプレイデータを元に、その【ザ・シムズ3】のゲーム世界観を、作成者独自の視点でオリジナルストーリー化した物です。

◆ この物語のメイン舞台には、【Hidden Springs (ヒドゥン・スプリングズ)】の街データセットを使用しています。基本的に、実際のゲーム中にあるそれらを使用、またはその名称を表記していますが、一部当方オリジナルの設定や建造物に名称、さらに公式ページを介した共有アイテム等も含む事があります。

物語によっては、各場所が予告無く移動変更して登場する場合があります。また物語の展開によっては、他の街データセットを使用する事もあります。

◆ お話に登場する人物（シム）達は、私自身がオリジナルで作成した者と、最初から各街データセット中にあらかじめ住人として作成され、配置されている者（既存シム）があります。

作品中で登場する彼らは、元から設定されていた特質（性格のような物）を参考にした上で、私Aymicが物語を作成する際に奥行きや味わいを出させたいという考えから、各シム達には私独自のキャラクター性を設定し、付けさせて頂いております。

◆ 【Another Days】の物語では、実際のゲーム上の世界観（システム）にのっとり、各シム達は性別に関係なく恋愛関係を構築させております。

◆ 予告無く、作品中に登場するオブジェクト等が変更する可能性もあります。

以上の事をあらかじめご了承の上、どうか何とぞご理解頂きますよう、お願い致します。





★ 今作品の主な登場人物 ★

■ カイル・レナーバック（主人公）／若年（20代） ■



慈愛心溢れ、穏やかで優しい性格の人物。その上明晰な頭脳をも持つ、超インテリ青年です。
現在は、街一番の大病院に籍を置く第一線の外科医として活躍中。
過去には料理人としてのキャリアも積んでおり、高い知性に裏打ちされた多彩な才能の持ち主。
。突っ走りがちなユージンの、頼れるスマート・ブレイキングシステム役でもあるパートナー。

■ ユージン・ラストン（主人公）／若年（20代） ■



裏表の無い性格で、どこかしらに少年っぽさを残す、やんちゃで奔放な熱血漢の青年です。
趣味である、釣りの腕前は超人レベル。職業は警察キャリア、国際的スーパースパイ（特別捜査官）。

主に、潜入捜査を専門とする“スーパーエージェント”の一人として、日々の平和維持に貢献。
おっとり癒し系なカイルとは正反対の、アクセル全開で元気一杯な彼のパートナー。

■ リアム・オデューク／若年（20代） ■





自他共に認める、超・科（化）学オタク。
仕事だけでは飽き足らず、自宅敷地内にマイラボ（研究室）を作ってまで日夜研究に勤しむ。
いつか世界一の科学者になる日を夢見て、次々と試作品を生み出しては人々と街をパニックに
陥れる、マッドサイエンティストの若芽です。

The Door to the Nightmare.

【 ランドグラーブ 産業科学施設 】



「よう、お疲れ」

「おう！ お疲れさん。 どうだった、成果は？」



「俺の方は**2**人ゲットだ。 お前は？」

「まあ、何とか俺も**2**人だな」



ステファン・ハルシ（プログラマー）：「あと1人来れば、半額割引チケット使えるんだよ。
なあ、誰か暇してそうなヤツとか、いないか？」

マイキー・コーエン（科学エンジニア）：「う〜ん、そう言われてもな〜」



ステファン：「いっその事、もう誰でもいいって。 手当たり次第、口掛けてみるよ」

マイキー：「できるかよ。 んなナンパじゃあるまいし」



「おっ、ナンパもイイねえ！ 飲み会やめて、そっちにするか」

「バカ、集めた他のメンツはどーすんだよ」



マイキー：「...おっ！ こりゃまた、丁度いい所にカモ出現」

ステファン：「何？」



「よう！ リアム！」



「やあ、マイキー。 どうしたんだい？」

「そっちこそ。 そんなに急いで、どうしたよ？」



リアム・オデューク：「エヘヘ…。 ま、ちょっとね〜♪」

マイキー：「...何だよ、そのアヤシイ含み笑いは？」



ステファン：「今晚、飲み会やるんだ。俺のよく行ってる店の割引チケットがあるんだけど、もう1人メンツが欲しくてさ。今、あちこちに声掛けてたトコなんだよ。どうだリアム？」

リアム：「えっ、飲み会？」



リアム：「あっちゃ～...、ゴメン！　せっかく誘ってくれて悪いんだけど、今回は辞退するよ」

ステファン＆マイキー：「なにッ!？」



マイキー：「何だよ、先約アリか？」

ステファン：「納得いかん！ 父さんが分かるように、理由を言ってみろ！」

リアム：「あー…。 ま、それはその～…」

「『世紀の大発明の糸口を掴んだ！』…って所でしょ？」



リアム：「わっ！　へ、ヘレナちゃん!？」

ヘレナ・モーテンセン（水質調査員）：「ふふ、その顔！　ビンゴでしょ♪」



ヘレナ：「何を考えてるかくらい、全部お見通しよ。　そもそも、この施設でリアム・オデュークを知らない人なんていないわ」

リアム：「えっ！　ボ、ボクってそんなに有名なの!?　なななな、何で??」



ヘレナ：「自称・サイエンス界のスーパーノヴァ（超新星）。 真性科学オタクのリアム。 所長から清掃係のおばさんに至るまで、みーんな噂してるわ。 もしかしたら一般常識の項目で、次期新入者向けの試験問題に出題されたりしてね？」

リアム：「そそそ、そんなあ!! い、イヤだよそんなのっ!!!」

ステファン：「ごもっとも」



ヘレナ：「それはともかく。 どう？ 騙されたつもりで、たまには出席してみたら？ 意外と思いがけず、良い情報なんかもゲットできたりするかもよ？」

マイキー：「無理無理、やめとけヘレナ。 突っ走ってる時のコイツにゃ、どんな誘惑も効かねーよ」



リアム：「ありがとう。 でも、本当に申し訳無いけど...今回は遠慮させてもらうよ」

ヘレナ：「え〜」

マイキー：「ほらな？」

ステファン：「おま、正気か!?! 水質ラボのヴィーナス、ヘレナ様直々のお誘いだぞ！ 何十何百と言う所員が望んでも、そうそう得られない栄誉だっतेのに!!?!」



リアム：「もちろん分かってるよ！ だけど。 例え、どんな小さなネタやひらめきであっても、思い立ったら吉日ってのがボクのポリシーなんだ」

ステファン：「なーにがポリシーだ！ そんなモン、トイレでケツ拭いたついでに流しちまえ！」



リアム：「その水洗浄化のシステムだって、全て科学技術の力だよ。　今じゃ当たり前の便座暖房にオート洗浄、その上人の気配を感知して、自動でフタだって開いちゃう。　どれも、百年前にはありえなかったモノばかりだよ！　この先、どこまで進化するんだろ!?! 考えただけで、もうワクワクしてこないかい？　ねえっ!?!」

ステファン：「便所の話はどうでもいい!!　そんなにワクワクするんなら、便器メーカーにでも転職しろ！」



リアム：「便器だろうと何だろうと、科学技術が我々人類をはじめ宇宙にもたらす可能性は、あまりにも偉大だよ!! 夢を現実にして来たのは全て、一人の人間のちっぽけな空想から始まり、やがてはそれに一筋の閃きが加わったお陰に他ならないんだ。これぞマジック! 中世なら錬金術! さらには創世神話にも相通じる世界! そう思わない? ね、マイキーなら...エンジニアならわかるだろ? ボクを惹きつけて止まない、この科学宇宙のロマンがさあっ!？」

マイキー：「.....まーな」



リアム：「おっと、つい話し込んでしまった！ そんなワケで、慌しくて本当にゴメンね。 次の機会には、ぜひぜひお呼ばれさせてもらうから」

ヘレナ：「そう…。 しょうがないね」

ステファン：「あーもうっ、この罰当たりめが!!!」



リアム：「ホントにありがとね、マイキーにステファン、そしてヘレナちゃん！ 良かったらこれに懲りず、どうかまた誘ってよね」

マイキー：「その次の時にも、『世紀の大発明』とやらの第二段が、お前のアタマに降りて来るとオチだったりしてな」

ステファン：「お前...。 将来、絶対ロクな死に方しねーぞ」



リアム：「それじゃお疲れ！ また明日ねっ☆」

ヘレナ：「ハイハイ、お疲れサマ」

ステファン：「ありえねえ...ありえねえよ、このヘレナ様のハニートラップが効かねえなんて...
。 やっぱアイツ、普通の人間じゃねえよ！」

マイキー：「ひょっとして、これがオタクの神通力ってヤツじゃねーの？」



ステファン：「じ、じゃあ、俺がアイツに代わってそのトラップの生贄に!! ヘレナ様！ 今晚俺と一緒に...、ど、どうッスか!!?」

マイキー：「オイ！ 飲み会はどーする気だ、ああ!?



“どーも！

えーっと。自己紹介が遅れちゃったけど、
ボクの名前はリアム・オデューク。

ここ、ヒドゥン・スプリングズの街の科学産業施設で、
化学研究チームメンバーの1人として、
研究&実験三昧な毎日を送ってまーす☆”



“さっき、ヘレナちゃんも言ってたように。

ボクは、元来の化学シュミが高じるあまり、
仕事だけじゃ飽き足らずに、
プライベートでも独自に化学の研究をしてるんだ。

まー、これじゃあ確かに
オタクって言われてもしょーがないよね。

でもでも、ぜーんぜんオタク上等ってカンジ！
むしろ、ボクとしちゃ最ッ高の褒め言葉であり、
名誉ある称号だくらいにまで思っちゃってるよ♪”



“ボク、出身はサンセット・バレーっていう名前の街でね。
そこに住んでた頃のある時、
たまたま雑誌だかネットだったかで、
このヒドゥン・スプリングズの地に語り継がれる
様々な不思議な奇跡の力の話を知ったんだ。”



“その、何ともファンタジックで
摩訶不思議な内容は、
このボクのサイエンス魂に火を付けるには十分だった。

もうすっかり興奮しきったボクは、
この手でその謎と力の秘密を解明してやろうと
一大決心したってワケ！

ハッキリ言ってほとんど衝動的に、
着の身着のまま勢い任せで
ここにやって来たのが全ての始まりさ。”



“な～んて、豪快な話のようだけど。

実を言うとボク....、

ホントは派手なノリや人付き合いが苦手な上に、
しかも結構な人見知りと来てるんだよね。

だから、

そんなボクが、いきなり1人知らない街へ
移住するなんて言い出したモンだから。

そりゃーもう、みんな驚いたのなんの!!”



“何より、
一番ドキドキだったのはこのボク本人だよ。
だってさ、
こんなコミュ障チックなボクがだよ？
果たして新しい土地に行って、友達なんてできるのかって。

だけど人間、案外どうにかなるモンなんだね。

例えばホラ、ここの警察署。
ここにもボクの友達が働いてるんだよ。

ユージンって言うんだけどさ。
これがもー、とにかく元気の塊ってカンジな男でね～”



“ちなみに、彼と縁ができたのは恥ずかしい話....
ボクが自宅での実験中に、
うっかりミスして爆発引き起こしちゃってさ。
で、その際に病院に搬送されたってのがきっかけ。

でもって、そこの搬送先の病院の主治医と
仲良くなったってのが始まりなんだよ。

その医者、カイル・レナーバックって言ってね。
内心、今まで頭脳にはそれなりに自信のあったこのボクでさえ
一目置く程に、これまたメチャクチャ頭の良い男なんだよ！
改めて、世界は広いな～って思ったね。”



“しかも。
彼ら2人も、同じサンセット・バレー出身だったと知って
ますますビックリ！

何かもう...、何てゆーか。

人の縁がどこでどう繋がるかってのは、
まさに天文学的確率ってヤツだよね!!”



“そーいう訳で！

ボクの夢は、いつの日か世界中の誰もが認める
超一流のサイエンティストになる事!!

その夢をこの手につかむため、
ボクは今日もこれから自宅隣接のマイラボにて
化学と言う名の宇宙の大海原へ向け、
1人航海に出るってワケなのさっ♪”



“さて。
ボクが今日、
こうも家路を急いだのには理由がある。

と言うのは。

今日は、いよいよ待ちに待った
最新作が誕生するからなんだ。”



“まあ...、せっかく誘ってくれた
マイキー達には申し訳ないけど。

このボクの研究に、また一つ大輪の花を咲かせると言う
世紀の一大イベントの為には。

多少の犠牲は覚悟しなくちゃならないのが、
科学者として生きる者に課せられた
悲しき宿命でもあって～...”

“♪♪♪～” (←※携帯コール音)



「一って、失礼。 ...！ おっと、噂をすればナントカ...かな？」



「やー、ユージン！ 相変わらず元気してた？ 電話で話すの久しぶりだねー。 最近、ずっとメールばっかだったよね」



「おう、そっちも元気そうじゃん！　ってか、そうそう。　俺、今しがた外出ついでに思い出したんだけどさ」



「ずっとお前から借りてた、【**Water World**】って写真集。　だいぶ前に借りたろ、俺？　うん、
そうそう」



「もう、かれこれ半年近くも借りっぱじゃん。 いーかげん、返そうと思ってさあ」



「な～んだ。別にそんなの、いつでもいいよー。元々、本棚の隅っこでホコリかぶせてたヤツだったしさ。わざわざ、そんな気遣わなくっていいのに」





「そうは言っても、人のモンは人のモンだろ。 親しき仲にも礼儀アリってな」



「俺もお前もお互い仕事の関係上、いつでも頻繁に顔合わせれるってモンでもねーじゃん？ せっかくお互い捕まるタイミングがあるんだったら、その時に会っとく方が良いと思ってよ」



「それと俺、今ジムの帰りなんだよ。 お前ン家からも近いしさ、差支えないならチョロッと寄らせてもらおうとも思ってたんだけど」





「そっか～。でもボク、あいにくちょうどこれから...」



「って、いや待てよ？ ...そうだ！ うんいいよ、おいでよ!! 実を言うとボク、これからちょうど最新作の完成作業に入る所だったんだ。 ゼヒともユージンにも見てほしいな☆」





「何？ 最新作??」



「そう！ 歴史に名を刻む、世紀の大発明誕生と言う感動の瞬間を、共に共有したいと思うんだ。
。 化学の小宇宙の躍動を、キミもその目と肌で感じてみたいと思わないかいっ？」





「へー。 何かよく分かんねーけど、面白そうじゃん。 行く行く♪」



「んじゃ、さっそく今から向かわせてもらうぜ！」





「うん、待ってるよっ！」



「一っと、これでよし！ やっぱ、新世紀誕生の瞬間には、立会人やギャラリーがいてくれた方が感動もひとしお、ってね」



「いよーっし!!! こーれで、また一歩ノーデル賞に近づいたぞお☆ メジャー科学雑誌、【サイエンス・ジオグラフィックス】の表紙がこのボクの顔と名前で彩られるのも、もう時間の問題だーっ♪」





「一Love, アーンド...?」

ユージン：「...サイエンス」（←※小声）



リアム：「ハイ！　いらっしゃーい☆　久しぶりだね～♪　さ、入って入って！」

ユージン：「相変わらず、こっ恥ずかしい合言葉言わせてんじゃねーよ！　ココ、幹線道路沿い
なんだからよ」

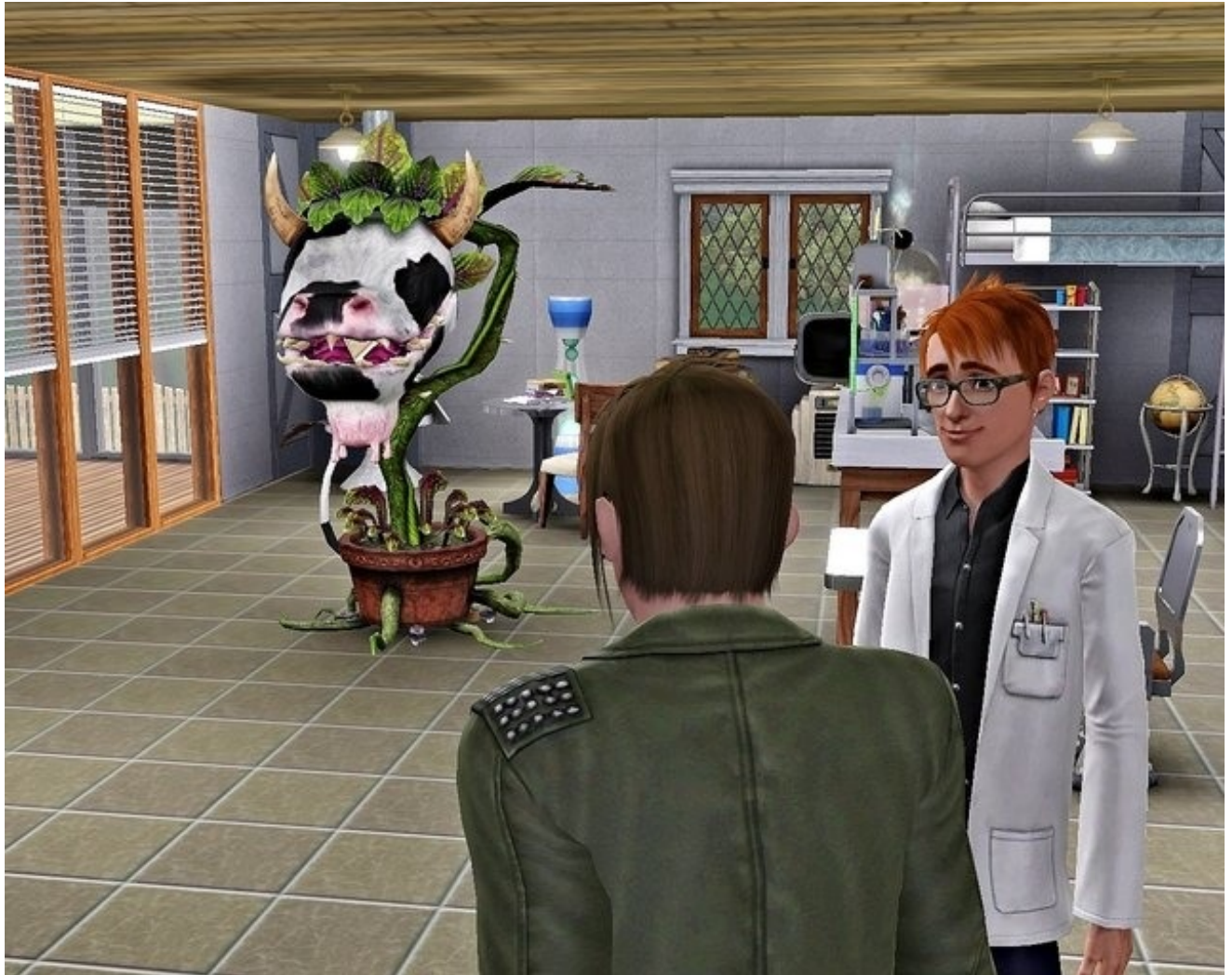


リアム：「いつの世も、化学者ってのは常に悪の組織の標的にされるのがお約束だからね。 できる事から、少しでもセキュリティ対策は講じないとさ」

ユージン：「テメーの所にゃ、間違っても来ねーから安心しな」



「!!!?」





ユージン：「な....、何だこりゃ!!？」

リアム：「名付けて【**Cow Plant**（カウ・プラント）】。 食虫植物をベースに乳牛の遺伝子を人工的に組み込んだ、言わばハイブリッドプラントさ」

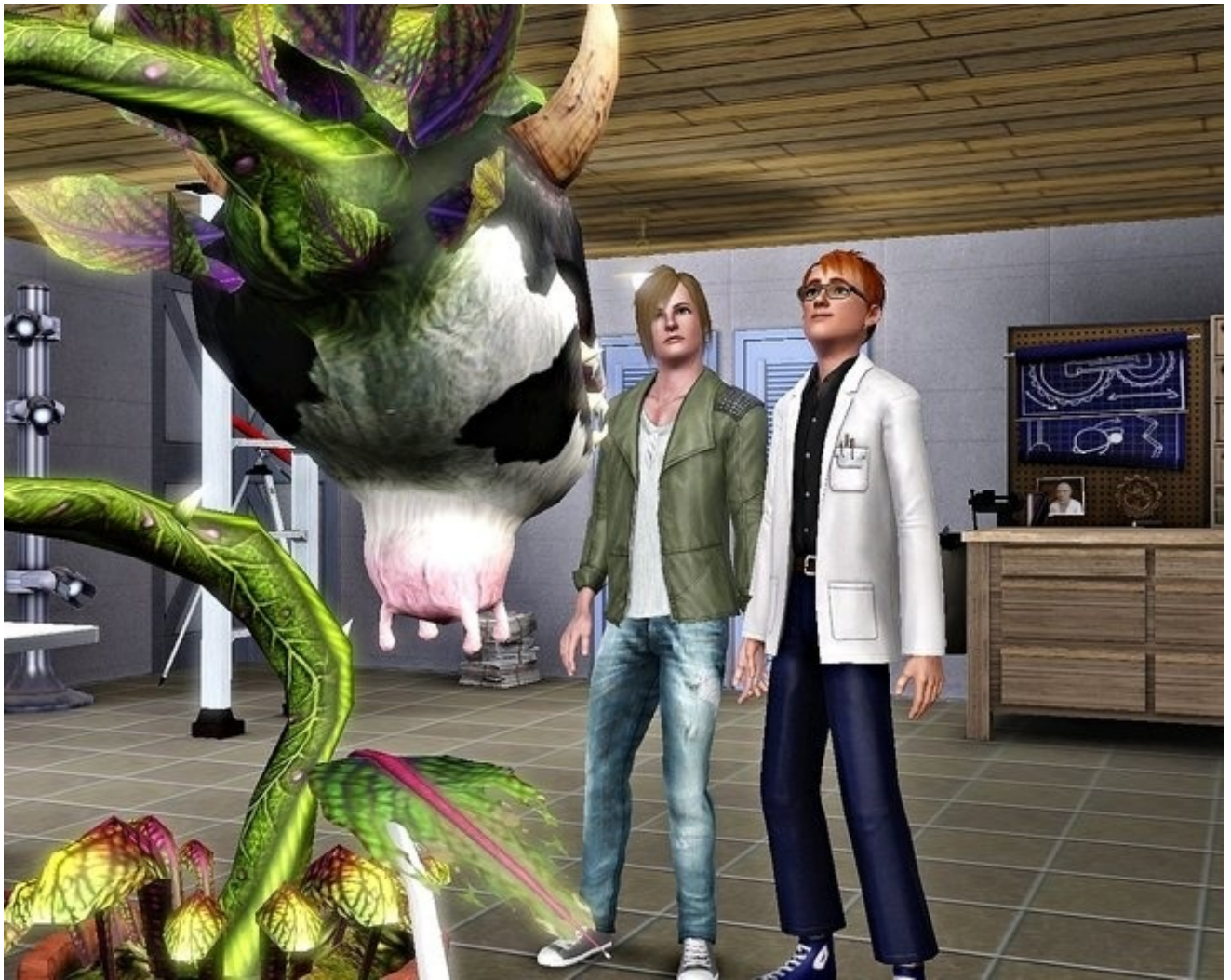


ユージン：「何の役に立つんだよ、こんなモン。 どっからどう見ても、モンスターじゃねえか！」

リアム：「確かに外見はそうかもだけど、見た目で判断しちゃいけないよ。 コイツは、最も理想的な革新エコロジー論の象徴なんだよ」



リアム：「乳牛は草食動物。 良質なミルクを出すには、良質かつ新鮮な草を摂取する必要がある。 それらの循環サイクル条件を完璧に満たしたのが、この**Cow Plant**なんだ」



「コイツは、植物を基盤とする体を持つてるゆえに、土に根を張ってそこから養分を吸収する。

その為、基本的にエサやりの必要は無い。 さらに光合成も行える為、新鮮で良質な植物を常に自らの体で作りに出している事にもなるんだ。 そうして、それを直接自分の体に還元させる事により、**365**日常に最高品質のミルクの提供が実現できると言った、これぞ乳牛生産者が夢にまで見た、まさに究極のエコ乳牛なのさ！」



リアム：「化学の世界は、常識に疑問を投げかける事によってこそ、新たなる世界の扉が開かれる。それには、自由で常識に囚われない柔軟な発想、さらにロマンと遊び心もが必要とされるんだ。そう考えればさ。難しく思われがちな化学って名の小宇宙が、ぐっと身近に感じて来やしないかい？」

ユージン：「.....そーかねえ？」



リアム：「そう思えば、ホラ。 コイツだってこの通り、カワイイもんだよ♪」

ユージン：「う～ん...」



リアム：「...へえ。 コイツ、ユージンに興味あるみたいだよ」

ユージン：「なに!!？」



リアム：「大丈夫だよ。 噛み付いたり、口からビーム出したりやしないから。 今、ボクが証明して見せたでしょ？」

ユージン：「お、おう」



ユージン：「.....なかなかカワイイ奴じゃんよ、コイツ？」

リアム：「でしょ？」



ユージン：「それに、よく考えたら俺。 牛撫でるの、初めてってヤツ？」

リアム：「そーりゃ良かった！ コレでまた一つ、人生の経験値がアップしたねっ☆」



リアム：「何なら、エサもやってみちゃう？ ベースが食虫植物だから、比較的雑食と言うか。
アメとかでも、与えれば食べるよ」

ユージン：「おー、やるやる！」



ユージン：「ふーん、要は好き嫌いはねーってか。 感心感心。 お前、見かけによらずイイ子じゃんよ！」

リアム：「ねっ？ だーから言ったじゃないかぁ♪ 人も牛も植物も、外見で判断しちゃダメだってね」



ユージン：「アハハっ♪ コイツぁイイや、気に入ったぜ!!」

リアム：「そう言ってもらえて、ボクも嬉しいよ！ このボクの才能が、また一つ実証されたようなもんだからね～♪」



ユージン：「なあ、リアム。 モノは相談だけどよ。 コイツの事...、一日ウチに連れてって世話しちゃってもいいか？ やっぱ...、ダメ？」

リアム：「いーともいーとも!! いやー、そんなに気に入ってもらえちゃうだなんて、光栄だなあッ☆」



ユージン：「っしゃあ、任しとけ!! うっは～、楽しみだぜえ♪」

リアム：「ボクの方こそ、実に有意義な研究成果を上げられて感無量だよ！ あ、ついでに後日、詳しい話を聞かせてよね～。 次の新作の、参考にしたいからさっ」



ユージン：「おし！　じゃ、早速車に乗せっぞ。　リアム、手ェ貸せ」

リアム：「えっ、もう運んじゃうの？　せっかく来たんだし、**Cow Plant**特製・絞りたてフレッシュミルクカフェオレの一杯も、堪能してからにしないかい？」



ユージン：「バカ野郎！　んな、キモイもん飲めっか！　俺が欲しいのは、ファンタスティックなクリーチャーだけで十分なんだよ!!」

リアム：「ええっ!?!　さっきの反応と言ってるコト、全っ然違うし!!　んも～、どーしてそう差別しちゃうかなあっ!?!　ちょっと、牛と植物がワンセットになったってだけなのにい」





(!!!?)



「...な.....・何だぁ!? ...コレ??」



カイル&ユージン：「...あ！」



カイル：「ユージン、これ.....」

ユージン：「ああ、リアムの新作なんよ。俺も、最初見た時はビビったけどさ。接してみると、コイツがまたなかなかカワイイヤツだよ♪ なモンで俺、今日一日世話しようと思って、チクっと無理言って借りて来ちまったんだよ!」





カイル：「.....ユージン。ちょっと中に...」

ユージン：「？ おう」



ユージン：「オイオイ、どしたよ？ 大丈夫か!？」



カイル：「な。 アレ...、ホントにカワイイと思うか？ 本気で？ マジで？ 真剣に？」

ユージン：「え。 ま...、まあそれなりにそう...ってか、そーじゃない、...ような。 ブサカワ？ ってか、キモカワ...っつーの？」



カイル：「何なんだよアレ!? ハッキリ言って、グロテスクも良いトコじゃん!! 人に危害加えたりとか、しないだろうな!!?」

ユージン：「あー...っと。 それは、大丈夫だと思うぜ。 ...たぶん」



ユージン：「そ、そんな心配する事ねーよ。 アイツは救世主だって、リアム言ってんぜ」

カイル：「は？ 救世主？ 何の??」



ユージン：「これからは、牛が光合成する時代なんだそうだぜ。　しかも、土に根を下ろす事で、俺達も美味しいミルクにありつけるって話でさ。　しかも、遊びゴコロとロマンによって、宇宙がぐっと近づいて来るんだってよ！」

カイル：「ナニ、訳分かんないコト言ってんだよッ!!　一体ぜんたい、何を吹き込まれて来た!!?」



ユージン：「ま、俺は難しい事分かんねーけどよ。 問題はないみてーなコトは、太鼓判押してたし。 一応、偏見捨ててペットだと思って見りゃ。 あれはあれで、意外に結構カワイイもんじゃねーの？」

カイル：「...言いたい事は、分からなく無いけど」



カイル：「だからって、何も正面玄関に置く事ないだろ！　うっかりお客とか来たら、どうするんだよ!？」

ユージン：「珍しいモンが見れたっつって、意外に喜ばれるんじゃない？」



カイル：「自分基準だけで、考えるんじゃないの！ 皆が皆、ユージンと同じ感覚で反応示すとは限らないぞ。 その証拠として、現にこうして僕がそっちと真逆なりアクションしてるじゃないか。 だいたい、現職警官の家で客に不安と恐怖を与えて？ おまけに、現役医者のお家において、ショック死する人間まで出そうってか!？ 言語同断！ シャレにもならないぞ!!」

ユージン：「い、いや、俺は別にそんなつもりじゃ」



ユージン：「...なあ～、そんなにおカタイ事言うなよ。　ちょっとばかり、遊びゴコロを持ったって損はねーだろ？　だからさ」

カイル：「遊びゴコロにも、センスが大事だろ！　うちは、ジャンク引き取り屋じゃないの!!」



ユージン：「それに、リアム言ってたぜ。 疑問を持つ事で、新世界の扉が開くってさ」

カイル：「疑問あり過ぎ!!! ってか、この他にまだ僕の想像を絶する世界があるってかい!? もうこれ以上、ムダな扉増やされたく無いから!! そっとしといてくれませんか!!?」



ユージン：「いーじゃん！ 俺が、ちゃんと責任持って世話すっからさあ!!」

カイル：「庭のスズメのエサやりですら、**3日**と持たなかった人の言う事なんて信用できません!!」



カイル：「か・え・し・て・来なさい。 **OK !?**」

ユージン：「...イエッサー...」



カイル：「よし、それじゃ車に乗せるぞ。 僕も手伝うから」

ユージン：「んだよ！ ケチい野郎だな。 遊び心もロマンもありやしねえ！ あるのは、人と牛をイジメてトキめく**S**ゴコロだけじゃねーかよ、サド医者。 今から、そんなんでもーするよ。

さっさと老けて、男としても枯れて。 でもって、立つモンも立たなくなって終わりなのが目に映るようだぜ。 あ〜あ〜」



カイル：「.....。 誰が、何だってえ？」

ユージン：「ジ...ジョークだって、ジョーク!! いや～、俺らも生涯男現役でいたいよなーって話
ツ☆」



「それにしても...」



カイル：「よく作ったもんだな。 僕も化学は嫌いじゃない。 もっともリアムは良い奴だと思ってるし、それに加えて弛まぬ努力を重ねる所や、飽くなき学究心とか...。 どれを取っても、僕としても頭が下がるよ」



「例え、今は日の目を見ずにしても…。 いつかきっと、誰もが認める一流のサイエンティストになる日がきっと来るって、僕は信じてる。 それから、物事には順番ってのがある。 もどかしく感じるような事でも、ちゃんとそれぞれに、それなりの理由ってのがあるんだよ」



「だから。 コイツも、まずはちゃんとしかるべき所で『先生』のお墨付きをもらってから、うちに連れて来るように。 何より、まだお前だって...。 自分自身が何者なのかとか、まだよく分かって無いだろ？ お互い、相手を知るその前に。 まずは自分を知って、それをわきまえる事。 それが、友達になる為に必要なプロセスだからね」



カイル：「そもそも、リアムだって。　まだコイツがどう言う物なのかとか、その全てを把握した訳でもないんだろ？」

ユージン：「たぶん…」



カイル：「だったら、なおさらだ。 主人でさえ、分かってない物をどうにかしようだなんて。
いくらなんでも、無謀過ぎるぞ」



「まあ、今の所は。 たまたま何事も無かったから、良いようなものの」



「これが万が一暴走でもして、僕らだけに留まらず、関係の無い他人まで巻き込んだらどうする？ どう責任取るつもりだったんだ？」



「別に、僕はユージンもリアムも責めたくて言ってる訳じゃない。ただ、個々の事に各自が責任を持つのは、当然であるってのを言いたいだけであって一...」



「つまりは、自分自身に責任も持てずに相手を尊重し愛するなんて、できやしないって事！」



「相手をまともに知らずして。 良好な関係や、意思疎通が健全に行われると思うか？」

(!!!!?)



「【愛とは、お互いに恐怖の無い処に有る】。 昔の人は、まったく良い事言ったもんだよ」



「そう言う訳で。 少しは僕の考えもー...って、.....あれ？」



「.....おかしいな？ 今...、ここにいたはずだったのに」



(家の中にもいないし...)



(.....裏庭にもいないときた)



(一と、なると。 考えられる事はもう、一つしかない)



「ー...アイツ！ 途中で逃げたな!？」



「...ったく、人がいつも大人しくしてるとあって...！ ユージンのヤツ.....!!!」



(調子に乗りやがって!! いっぺんこの辺で、ビシッと引き締めてやらなきゃダメだ、アイツは!!!)



“♪♪♪” （←※携帯コール音）



『一あ、カイル君？ 久しぶり。 ボクだよ、リアムだけど...』



「ちょっと前からユージンに電話してるんだけど、何か全然繋がらなくてさ。それで、カイル君の方に電話させてもらったんだけど」



「多分、もうユージンから聞いてるってか...見てると思うけど。あの**Cow Plant**、やっぱまだ人の手に渡すには早過ぎるかと思ってね。もう少し、作り手であるボクが納得行ってから渡したいと思うんだ。それで、今さらでホント申し訳ないんだけど...、今日の所は、返してもらえないかなって思って」



「ちょうど、僕からもそっちに電話しようと思ってたんだ。 ...そっか。 リアム、やっぱり君は良い奴だよ。 もし、これで何も言わずにほっぱり出すようでしたら。 悪いけど、僕は今後の付き合いをマジで考えさせてもらう所だったよ。 ありがとう」



「うん、ホントにごめん。　と言う訳で...ユージンいるかな？　直接話がしたいと思うんだけど」



「それが、今度はこっちが申し訳無いんだけど、アイツどっかに逃げちゃったんだ。 どうにも、僕のお説教が気に食わないらしくてね。 今、どこで何してんだか？ コッチが聞きたいくらいだよ。 ああ、もし万が一そっちに行ったりしたら、悪いけど知らせてもらえるかい？ メールでも何でもいいから。 僕としても、そっちに迷惑掛けたくないからさ」

リアム：『あ...、それは構わないけどさ。 でも...』



リアム：『どうか、あんまり怒らないでやってよ。 元はと言えば、ボクが発端だし...』

カイル：「そうでもないよ。 アイツの軽率さも原因だと思うし。 取りあえずアイツ。 今週一週間は、毎日毎食野菜サラダオンリーで行く予定だよ。 それ以外のバツは、これから考えるけど。 え？ キツイ？ とんでもない！ 少し野菜食わせて、脳と精神を鎮静化させるビタミン補わさなきゃ、ソッチも何かと迷惑だろ？ イイ薬だよ!!」

Another Days

<http://p.booklog.jp/book/97512>

★ 【The Door to the Nightmare.】 元作作成・mixiページUP年月日 2013.4.22

著者 : Aymic

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/aymic1973/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/97512>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/97512>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ